

山口県文書館 古文書活用講座の紹介

山口県文書館では、普及活動の一環として3つの古文書講座を行っています。その中のひとつに古文書活用講座があります。この講座は、他の2つの講座（古文書基礎講座・古文書専修講座）がそれぞれ初心者・中上級者対象であるのに対し、受講者を小中高校の教員に限定して行っている独特のものです。

この古文書活用講座は平成4年度からスタートしました。定員25名、対象を社会科担当の教員とし、募集要項には「古文書の読解能力を高め、郷土史教育に原典から取り組む能力を高める」ことをその目的に掲げています。毎年定員を超える応募があり、実際には社会科以外の教員の参加もみられます。ちなみに、受講者へのアンケート調査によれば、受講の動機としては、「社会科の郷土学習に役立つため古文書を読む力をつけたかったから」とする方と「自らの学習のため」「古文書に興味があったから」とする方に大きく分かれるようです。

講座は、教員対象であることを考慮し、夏休み中の8月に4日間集中して行っています。夏休み中でも教員には諸行事が多いことを考え、平成7年度まではお盆休みを挟んだ時期に行っていましたが、8年度からは8月の最終週に変更しました。時期を変更したことで応募状況に特に変化はみられませんでした。受講者へのアンケートでは賛否両論のようです。

講座の一日は、朝9時から夕方4時まで、1コマ1時間30分の講義を4コマ行うハードなものです。初日の1コマ目はオリエンテーションの時間とし、文書館の事業内容を紹介したり、文書館閲覧室や書庫内の案内にあてています。2コマ目以降実際の講義に入りますが、古文書に触れるのは初めてという受講者も多いため、初日は「ヘンヤツクリ」「変

体がなのいろいろ」「主な異体字」など古文書読解のための基本的な知識を習得するための講義や、郷土史教育での利用頻度が高い絵図の見方を教える講義（「絵図の見方」）などを行っています。

2日目以降は、当館職員6人が各2コマ（3時間）を担当し、それぞれが選んだテキストをもとに講義を進めていきます。テキストを選ぶ際、職員間で全体的なテーマの統一を図ることは特にしませんが、各職員の興味関心が異なることもあり、結果的に内容・難易度ともバラエティーに富んだテキストになっているように思います。ちなみに平成8年度の場合、「近世防長の人口史料をよむ」「朝鮮通信使関係文書をよむ」「近世漁業史料をよむ」など6つのテーマでおこないました。1職員の担当するのは3時間ほどですからそれほど多くの分量をこなすことはできませんが、単に文字の読み方だけでなく、文書の内容について理解を深めてもらえるよう、出来るだけ詳しい解説を加えていくよう心がけています。

ところで本講座の年齢構成をみると、平成8年度の場合、20代1人、30代11人、40代9人、50代以降3人、となっており、30～40代がその大半を占めています。この傾向は他年度でもほぼ同様であり、年配の受講者が圧倒的に多い他の古文書講座とは大きな違いをみせています。各地の古文書講座において、受講者の年齢層が高いことはよく耳にするところですが、決して若い人の中に古文書に関心を持つ人が少ないわけではなく、仕事の都合上、ウィークデイに行われる古文書講座には参加できないのが実状のようです。古文書講座の開設には、受講希望者がいかに参加しやすい形をとるかが重要であることを示しているように思われます。

受講者へのアンケート調査によれば、幸い本講座は概ね好評を得ているようです（もちろん様々な要望もありますが）。実際のところ、わずか4日間24時間ほどの講座で、古文書がすらすらと読めるようになるわけではあ

りませんが、受講者に古文書への興味・関心を深めてもらえていることは確かなようです。また館としても、文書館利用者層の拡大を図り、文書保存の重要性や文書館に対する理解を深めてもらえる場として意義の大きい講座だと考えています。

山崎一郎：山口県文書館